

研究所・教育研究施設

研究所が 大学院教育に果たす役割

京都大学には、我が国の学術研究の中核的研究拠点として各学術分野を牽引する14の附置研究所が設置されています。これらの研究所は、基本的には研究面の活動を主体としていますが、大学院研究科との協力の下、最先端の研究環境を活かして優れた若手研究者の養成に取り組んでいます（協力講座）。

各研究所において大学院学生として教育を受けることを希望される場合は、それぞれの協力講座を開講している大学院研究科に問い合わせ、受入状況をご確認ください。

P76 化学研究所

P77 人文科学研究所 / 再生医科学研究所

P78 エネルギー理工学研究所 / 生存圏研究所

P79 防災研究所 / 基礎物理学研究所

P80 ウイルス研究所 / 経済研究所

P81 数理解析研究所 / 原子炉実験所

P82 霊長類研究所 / 東南アジア研究所

P83 iPS細胞研究所 / 教育研究施設

P84 教育研究施設 / 協力講座一覧

INSTITUTE FOR CHEMICAL RESEARCH

化学研究所

http://www.kuicr.kyoto-u.ac.jp/index_J.html

研究

化学研究所(以下、化研)は、化学を物質研究の広い領域として捉え、物質に関する真理を究明するとともに、時代が求める諸課題の解決にも資する研究を行っています。このような立場で2010年度から、「化学関連分野の深化・連携を基軸とする先端・学際研究拠点」として他大学・研究機関と多彩な共同利用・共同研究を推進し、一方、国内3大学と「統合物質創製化学推進事業」による研究連携を密にしています。2007年度から3年間公募されたグローバルCOEプログラムには化学系、物理系で採択された3件の拠点に中核部局の一つとして参画しました。また、同年度開始の「世界トップレベル国際研究拠点形成促進プログラム・iCeMS」にも、積極的に関わっています。

化研の高い研究活性は、広い化学関連分野をカバーする32の研究室(研究領域)が進めてきた先鋭的基礎研究、研究室相互や他部局・他研究機関と推進してきた学際・融合研究を反映しています。また、化研では海外研究機関との部局間交流協定(現在58件)などに基づく人的交流も盛んで、世界でも化学関連分野の先端研究の一つの核となっています。

教育

化研の32の研究室は、理学、工学、農学、薬学、医学、情報学、人間・環境学の7研究科12専攻にわたる「協力講座」となっていて、約200名の大学院生(うち外国人留学生約30名)のきめ細かい指導に当たり、広い視野を持つ世界トップレベルの研究者の育成に努めています。その一環として、研究室や研究室をまたぐセミナーなどに加え、化研の大学院生が分野を越えて互いの研究内容を認識・参照する場としての大学院生研究発表会、化研全体の年次報告に当たる研究発表会を毎年開き、また、招へい外国人研究者との意見交換・交流の場であるセミナーやシンポジウムも多数(2012年度は40回)開催しています。さらに、やはり化研を挙げての事業として、大学院生に対して、国際会議での研究発表のための短期海外渡航を奨励するとともに、研究滞在を目的とする中長期海外派遣も力強く支援しています(2012年度は、それぞれ35件、14件)。

博士後期課程2年 中西 洋平さん
(工学研究科・高分子化学専攻)



リビングラジカル重合という長さの揃った高分子を生成できる技術を駆使することで、様々な高分子材料を自在に設計することができます。また、材料の高次構造を高度に制御することで、今までにない新たな機能の発現が狙えます。この考え方を軸に、私は次世代太陽電池を志向して新規高分子電解質・セパレーターに関する基礎研究を展開しています。

化学研究所は研究分野の垣根を越えた“横のつながり”が生まれる環境にあります。具体的には、4月の新入生歓迎会、7月の涼飲会、12月の忘年会、3月の院生発表会、各種セミナーや講演会といった親睦イベントが豊富で、研究科の異なる教員や学生同士と交流しやすいという大きな利点があります。こうしたイベントで交流を深めた仲間とともに、お互いの研究のハードルや成果の喜びを分かち合っています。最先端の機器だけでなく、他では決して味わうことのできない魅力的な研究環境を持つ化学研究所で、あなたも一緒に有意義な大学院生生活を送ってみませんか？

INSTITUTE FOR RESEARCH IN HUMANITIES

人文科学研究所

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>

研究

人文科学研究所は、人文社会系の大学附置研究所としては国内最大規模のもので、現在は文化研究創成、文化生成、文化連関、文化表象、文化構成の五研究部門と、東アジア人文情報学研究センター、現代中国研究センター、人文学国際研究センターの三附属研究施設から構成されています。人文科学研究所は人文科学分野において学際的共同研究の手法をいち早く取り入れました。現在も 28 の共同研究班において、「複雑化・多様化した現代社会において、人文科学が果たす役割は何か」という問題を多様な角度から探究しています。2010 年度からは文部科学省の認定による共同利用・共同研究拠点「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」として、課題を公募する共同研究などの活動を推進しています。



教育

人文科学研究所は、次世代の研究者を育成する教育活動にさまざまなかたちで力を注いでいます。

- 全研究部門および附属研究施設から 27 名の教員が、文学研究科の協力講座において大学院教育にあたっています。また、協力講座に準ずるかたちで教育学研究科人間・環境学研究科(共生文明学専攻文化人類学)、アジア・アフリカ地域研究研究科において講義と学生指導を担当しています。
- 地球環境学・学舎においては、「両任制」流動教員(1 名)を務めています。
- これら以外にも、文学研究科や経済学研究科において、大学院授業担当のかたちで多数の教員が教育にあたっています。
- さらに特筆すべきは、学内外の博士後期課程以上の学生を共同研究班員として受け入れ、実践的研究活動に参加する機会を提供していることです。領域を異にする多数の専門研究者が参加する共同研究の場を通じて、精緻な文献研究、フィールドワークなど、多様な研究手法と学際的視野をもつ若手研究者を養成することに努めています。また、ポスドク研究者を研修員などとして受け入れ、活躍の機会を提供しています。

博士後期課程 3 年 飯塚 真弓さん
(人間・環境学研究科・共生文明学専攻)



私の専門分野は文化人類学です。人類学の主な手法は、調査地に長期滞在し、人々の暮らしに寄り添い、彼らの生活の営みと生を間近に観察するフィールドワークです。私は南インドのヒンドゥー教の寺院司祭を対象に、建築空間と宗教実践、ジェンダー等について研究をしています。博士課程進学後は、人文科学研究所主催の共同研究に参加してきました。普段の大学院のゼミとは異なり、共同研究は文化人類学だけでなく、社会学・心理学・歴史学・地理学・精神分析学など専門の異なる研究者から構成されています。長期フィールドワークを終え、博士論文を執筆する者にとって、研究会は、現地で経験した疑問や学問的な課題を解決する場として最適な環境といえます。また、人文科学研究所では国際セミナー等も頻繁に開催されています。これらに参加することで、地域や専門分野の垣根を越えて、様々な分野で活躍されている研究者の方々と交流することができます。

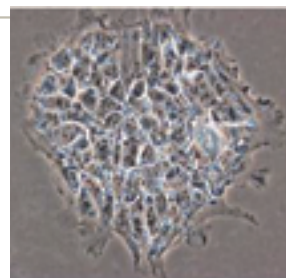
INSTITUTE FOR FRONTIER MEDICAL SCIENCES

再生医科学研究所

<http://www.frontier.kyoto-u.ac.jp/>

研究

再生医科学研究所は、我が国初の「再生医学」を冠した研究所として設立され、現在、5 研究部門、2 附属施設からなる 27 研究室で構成されています。現在、研究所で行われている研究には、大きく分けて①ヒト ES 細胞、iPS 細胞、体性幹細胞等を使用した幹細胞研究②神経・筋・骨・血液など再生医学の主な標的となる組織の発生・再生機構に関する医科学基盤研究③自己組織再生の「場」を形成するため、数々の生体組織代替材料、免疫隔離膜、人工細胞外基質、成長因子徐放システムの開発などの組織工学研究④自家間葉系幹細胞を用いた骨再生治療などの臨床応用研究があります。



本研究所の特色は、基礎医学・基礎生物学の知見を踏まえ、工学・再生医療、幹細胞医科学—再生医療の明確なベクトルを持った研究を展開し、基礎研究から再生医療の実現への医学・工学・理学出身者による学際的、融合的研究を進めていることです。

2008 年 10 月に文部科学大臣より共同利用・共同研究拠点「再生医学・再生医療の先端融合的共同研究拠点」に認定され、本研究所に集約された再生医学の知識・技術を基に、多様な先端的共同研究を推進するとともに、再生医学研究・再生医療を積極的、意欲的に担う研究者の教育・育成に努めています。

教育

教育面では、再生医学、再生医工学の高度な研究を通じた教育により、再生医学の研究者、医療従事者、また新たな医療産業の担い手となる人材の育成を行うことを理念としています。

前述のように本研究所では、医学・工学・理学出身者による学際的、融合的研究を進めていることに関連して、大学院医学研究科、工学研究科及び理学研究科の協力講座として大学院生の教育を行っており、医学・工学・理学の内の 1 つに高い専門性をもち、且つ、それら 3 つの領域を全般的に理解し、広い視野で研究・開発を遂行できる研究者・技術者を養成することを教育目標に掲げています。

博士課程・2 年生 林 瑛理さん
(医学研究科・医科学専攻)



組織の再生は、細胞に自然に備わる仕組みを利用して再生へ向かわせることや、正常な細胞や組織の成り立ちを人工的に高度に再現すること等で達成されますが、何れの戦略にとっても、細胞や組織についての精緻な理解と確かな専門技術が不可欠です。このため、体の各組織や幹細胞の研究から医工学、臨床応用まで、再生医科学研究所の研究分野は多岐に亘り、医学はもちろんのこと、工学、農学、理学など様々なバックグラウンドを持つ方々が、多様な視点を活かして活躍されています。

英語での呼称には「フロンティア」の語が用いられていますが、最新鋭の設備に恵まれ、幅広い領域の専門家と豊富なノウハウが集まった研究環境もさることながら、次代の研究分野創出に繋がる成果を上げていることもフロンティアたる所以と言えます。過去の研究成果には、近年発展の目覚ましい学際融合研究や、ノーベル賞受賞で益々注目される iPS 細胞研究等、最先端の研究領域の先駆け、礎となったものも。学生がトップクラスの研究者とベンチを並べ、分野の垣根を越えて学び合いながら、再生医学の開拓を目指して研究に邁進できる理想的な環境です。

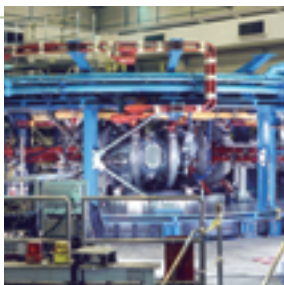
INSTITUTE OF ADVANCED ENERGY

エネルギー理工学研究所

<http://www.iae.kyoto-u.ac.jp/>

研究

エネルギー理工学研究所は、エネルギーの生成、変換および利用の高度化に関する研究を行うとともに、全国の大学その他の研究機関研究者の共同利用に供することを目的とし、現代社会における最大の課題のひとつであるエネルギー問題の解決を目指した研究を行っています。在籍する教員・研究者の学術基盤は、理学、工学の多岐の分野にわたっています。これら多様な分野の有機的な連携・融合を通して、環境調和性に優れ、社会的受容性の高い新規エネルギー源およびエネルギー有効利用システムの実現を目指す新たなエネルギー理工学の研究領域の開拓を進めています。現在は、核融合や太陽光によるエネルギーなどを目標に、重点複合領域研究として「先進プラズマ・量子エネルギー」と「光・エネルギーナノサイエンス」を推進しています。また、国内外の研究者の共同利用・共同研究を進めており、国内外の多くの共同研究者に、本研究所の特徴ある大型研究設備や独自に開発・整備した装置群が活用されています。また、2013年度からは特別経費プロジェクト「革新的高効率太陽光利用技術の開発」を開始しています。



教育

本研究所の全ての研究分野は、エネルギー科学研究科の協力講座として大学院教育に参画しており、毎年70~100名の学生が本研究所で指導を受けています。特に、多くの博士後期課程学生を擁し、中でも外国人学生の割合が高く、国際的に開かれた研究所となっています。これまで、韓国、中国や東南アジアの大学との間でJSPS「アジア研究教育拠点事業：先進エネルギー科学」をはじめとする国際交流事業やグローバルCOEプログラム「地球温暖化時代のエネルギー科学拠点」、その他多くの国際・国内協力事業を活用し、エネルギーに関する特色ある大学院教育を進めてきました。外国での研究活動や国際集会・会議への参加の機会が大学院学生にも数多く与えられています。本研究所で学ぶ多くの学生が、本研究所への配属希望の理由として、研究所の特徴的な最先端大型装置や先端の研究に魅力を感じたことをあげています。国際的に見ても優れた研究設備群と先進的な研究内容ならびに国際的な研究環境を活用して、高度な専門能力とグローバルな視点を持ち、国際舞台で活躍のできる研究者・技術者の育成に努めています。

坂口 浩司教授
(エネルギー利用過程研究部門)



原子や分子を積み木の様に組み立て、これまでに無い機能や効率を持つ材料を作る究極の「ものづくり」の科学技術がナノ工学です。私の研究室では、有機分子を用いたエネルギー変換材料に関するナノ工学の研究を行っています。本講座で開発された、光エネルギー変換に用いられる材料である電気を流すプラスチックを金属表面上に1分子レベルで組上げる技術を用いて従来に無い新物質・材料を開発しています。エネルギー科学研究科の協力講座として大学院学生を毎年受け入れています。入ってくる学生の専門分野は様々で、化学、物理、電子工学、機械工学、情報処理等の出身者がいます。ナノ工学はこうした複数の学問分野の総力戦であり、複数のアイデアを結集することにより良い成果が表れます。学生時代は一つの興味にこだわるのも構いませんが、多様な興味を持つことを心がけると自分の将来にとって素晴らしい財産になると思います。若い人たちのチャレンジを期待しています。

RESEARCH INSTITUTE FOR SUSTAINABLE HUMANOSPHERE

生存圏研究所

<http://www.rish.kyoto-u.ac.jp/>

研究

生存圏研究所は2004年4月に設立された研究所です。その目的は人間生活圏、森林圏、大気圏、宇宙空間圏を人類の「生存圏」として組織的・包括的に捉え、それらの診断・解析を行うと同時に開拓・創成する先進的技術開発を促進し、総合科学としての「生存圏科学」を確立することにあります。これを効率よく遂行するため、「環境計測・地球再生」「太陽エネルギー変換・利用」「宇宙環境・利用」「循環型資源・材料開発」という4つのミッションを定めて、分野横断的な研究を推進しています。また萌芽的研究の発掘にも力を入れています。当研究所は、2010年度からは「生存圏科学の共同利用・共同研究拠点」としての活動を開始しました。研究施設・設備の全国・国際共同利用や、生存圏科学のデータベース構築とデータ配布、それらを活用した国際共同研究を推進しています。



教育

生存圏研究所は、農学、工学、情報学、理学と広範な研究分野の背景を持った教員による分野横断的な学際教育を通して、持続的社会的構築に深く関わる生存圏の科学を担う多彩な人材育成に取り組めます。また全国・国際共同利用に供される最先端の研究設備・データベースを利用した研究に接することを通して、総合的な知識と俯瞰的かつ国際的な視野をもって生存圏の科学の発展に寄与する研究・教育者を育成します。協力講座として参加する研究科は、理学研究科、工学研究科、農学研究科、情報学研究科です。また地球環境学部の協働講座および生命科学研究科の研究指導委嘱講座にもなっています。これらの幅広い研究分野から集まる大学院生は70~90名に達します。

山川 宏教授
(宇宙航行システム工学分野)



本研究室(宇宙航行システム分野、工学研究科電気工学専攻の協力講座)は、「宇宙を知り、宇宙を利用する」というテーマのもと、人類が宇宙へ進出していくために必要な宇宙観測・宇宙利用・宇宙探査技術に関して幅広く研究を行っています。特に、太陽風・太陽光・地球磁場等の宇宙環境を利用した全く新しい宇宙推進システムの研究開発、従来にはない超小型回路による宇宙環境計測装置等の研究開発を、解析的アプローチ、計算機シミュレーション、そして、基礎的な実験を通して行っています。さらにはJAXA(宇宙航空研究開発機構)の科学衛星や観測ロケット等の宇宙機に搭載することを目指しています。当研究室は、生存科学計算機実験分野、生存圏電波応用分野と合わせてスペースグループと呼ばれています。スペースグループでは、宇宙工学・宇宙科学に関する知識を共有しており、多くの学生が時には独立して、時には共同で研究に励んでいます。また、JAXAや他大学との共同研究、国内外での学会発表にも、学生が自主的に取り組んでいます。

DISASTER PREVENTION RESEARCH INSTITUTE

防災研究所

<http://www.dpri.kyoto-u.ac.jp/>

研究

防災研究所は、自然科学から人文・社会科学にわたる災害学理の追求と、防災学の構築に関する総合的な研究に取り組んでいます。災害と防災に関わる多種多様な課題に対して、災害学理の追求を目指した基礎研究を展開するとともに、現実社会における問題解決を指向した実践的な研究を実施し、安全・安心な社会の構築に貢献すべく、約 100 名の研究者と 200 名の学生が日々研究に取り組んでいます。研究対象は地震津波、火山噴火、地盤災害、洪水・渇水などあらゆる自然災害であり、学問領域は自然科学、人文・社会科学、工学、情報学などの領域にわたり、防災研究を標榜する大学附置の研究所としては、世界屈指の規模と研究の水準を誇っています。また、防災研究所は、自然災害に関する総合防災学の共同利用・共同研究拠点として認定されており、重点研究課題として、(1) 南海トラフ地震など巨大地震・津波、火山噴火対策研究、(2) 気候変動・極端気象に関する適応策研究、(3) 国際防災実践研究を掲げ、国内外の研究機関との共同研究も積極的に進めています。



教育

防災研究所は理学研究科、工学研究科、および情報学研究科の協力講座として、大学院教育を担っており、3 研究科あわせて約 200 名の大学院生が学んでいます。先端のかつ学際的な防災研究に結びついたセミナーや、最先端の実験装置を用いた実験や解析、現地調査・フィールドワークなど、防災研究所ならではの学びができます。外国人客員教授や、国内外の第一線研究者達による特別講義も大きな魅力です。さらに 2011 年度からは、博士課程教育リーディングプログラム「グローバル生存学大学院連携プログラム」、大学の世界展開力強化事業「強靱な国づくりを担う国際人育成のための中核拠点の形成」にも参画しています。世界の英知に触れながら、研鑽を積み重ねることができるプログラムとなっています。防災研究所はこのような活動を通じて、次世代を担う人材の育成に務めています。

宮本 匠 特定研究員
(巨大災害研究センター・巨大災害過程研究領域)



防災研究所では、理学、工学、社会科学などさまざまなバックグラウンドをもった研究者が、かけがえのない人の命や暮らしを守るため、領域横断的に、災害という自然現象をより深く原理的に理解する研究、そしてそれを社会の中で実践的に応用する研究をしています。私自身は、新潟県中越地震の被災地をフィールドに、地域の皆さんと一緒に取り組みながら、内発的な復興過程や防災がいかに可能なかを研究課題としています。被災地に身を投じてみると、それまでの自分の人生や生活では出会うことのなかったさまざまな人や考え方、哲学に出会います。災害にあってもたくましく生きてく人間の力強さや、自然の豊かさや厳しさをともに受け入れる先人の知恵は、災害の被害を完全に封じ込めてしまおうとするのではなく、被害をできるだけ減じながらも豊かな自然との共生を目指そうという減災の哲学に通底するものがあります。防災・減災研究は、私たちのよりよい社会のあり方をもとめる社会構想につながる研究です。

YUKAWA INSTITUTE FOR THEORETICAL PHYSICS

基礎物理学研究所

<http://www.yukawa.kyoto-u.ac.jp/>

研究

素粒子論では、自然界の最も基本的な粒子やその間に働く 4 つの力を研究しています。強い力、弱い力、電磁気力を統一するゲージ理論が確立されつつあります。重力の量子論としては、素粒子を一次元的な紐とみなす超弦理論による研究が盛んです。原子核理論では、強い力を担うハドロンとその集まりである核子や原子核の構造・性質を研究しています。統計・固体物理学では、巨視的物質の持つ様々な興味ある性質(超伝導、超流動など)を基本的な力と、多数の粒子の効果から説明することが目的です。非平衡開放系での物質の運動状態や相構造の解明も重要な課題です。宇宙・天体物理学では、銀河や宇宙スケールの現象を、一般相対論と素粒子論に基づいて解明することを目指します。宇宙の創成、ブラックホールの物理なども大きな課題です。

本研究所では、非常勤研究員等を積極的に受け入れています。また、多くの外国人研究者が長期・短期に訪れ、年間 100 を超える研究所セミナーの約半数は外国人研究者によるもので、国際的センターの役割を果たしています。



教育

基礎物理学研究所は、大学院理学研究科物理学・宇宙物理学専攻の協力講座として、大学院教育を担っており、理論物理学の四つの基礎的諸分野である素粒子論、原子核理論、統計・固体物理学、宇宙・天体物理学の大学院生(修士・博士後期課程)を毎年十数名受入れています。この四つの学問分野は、扱う対象の特徴的な大きさの尺度に対応しており、極微の世界(素粒子論)、原子の中心にある原子核程度のもの(原子核理論)、日常生活で遭遇する様々な物質(統計・固体物理学)、銀河や銀河団から宇宙そのもの(宇宙・天体物理学)です。23 人の教師陣が基礎的な講義から最先端の話題を含めた演習まで幅広いメニューを用意しています。外国人客員教授や、国内外の第一線研究者達による集中講義も大きな魅力です。

博士後期課程 2 年 杉本 高大さん
(理学研究科・物理学・宇宙物理学専攻)



私の所属する研究室では凝縮系物理、すなわち物質の中の電子や格子がお互いに相互作用したり集団的に振る舞ったりすることで起こる現象や性質に関する物理を、解析的な手法や数値計算を駆使して調べています。量子レベルの世界を支配する基礎的な方程式はすでにわかっているのですが、それだけではこの多種多様な現象で満ち溢れている世界を理解したことにはなりません。例えば超伝導という、低温にすると電気抵抗が 0 になる現象がありますが、この基礎的な方程式を眺めていただけでは何故そういことが起こるのか分かりません。電子がたくさん集まって相互作用することで、始めてその現象が理解されます。2008 年に日本人のグループによって鉄系超伝導体という超伝導を引き起こす新しい物質が発見されましたが、私はこの物質についての性質を研究しています。基礎物理学研究所には、高性能なスーパーコンピュータや多くの蔵書を誇る図書館があります。また普段から頻繁にセミナーや研究会が開催され、国内外の一流の研究者と議論する機会が数多くあるなど、非常に充実した環境であると言えます。このような素晴らしい環境で研究できることを大変嬉しく思っています。

INSTITUTE FOR VIRUS RESEARCH

ウイルス研究所

<http://www.virus.kyoto-u.ac.jp/>

研究

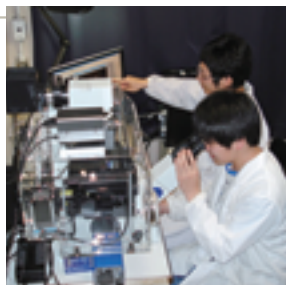
ウイルス研究所は1956年に設立されて以来、病気の原因としてのウイルスの研究とともに、ウイルス研究の基盤として、生命の謎を解き明かす研究に携わってきました。その過程で、我が国の分子生物学研究に中心的な役割を果たし、また新たなウイルスを発見するなど、基礎から応用研究に至るさまざまな貢献をしてきました。

本研究所は「ウイルスなどの感染症による脅威を取り除き、安心した社会の構築に寄与する」「ウイルスの研究をさらに深め細胞および個体レベルの生命現象を理解する」「免疫・神経系などの高次生命現象を理解し、ウイルス疾患を明らかにし、かつ予防する」等を目的とした研究を行っています。

教育

ウイルス研究所は、基礎生物学から医学にわたる多様な分野の研究者が在籍して研究・交流をしており、大学院教育においても5つの研究科(医学研究科、生命科学研究科、理学研究科、薬学研究科、人間・環境学研究科)を通じて多数の学生を受入れています。当研究所に所属する大学院生は学術交流会(所内行事)や国際学生セミナー(生命科学研究科との共催)などの行事を通して様々な異分野の研究に接する機会があります。

さらに、平成22年度からは、「ウイルス感染症・生命科学先端融合的共同研究拠点」として共同利用・共同研究拠点となりました。当研究所はこのような非常にユニークな研究環境を生かして次代を担う世界トップレベルの研究者を育ててきました。今後とも、異分野交流を活発に進めることによって、研究・教育に大きな貢献をしていきたいと考えています。



博士課程4年 三浦 未知さん
(医学研究科・医学専攻)

2010年度からウイルス研究所ウイルス制御研究領域にて、ヒトT細胞白血病ウイルス1型の研究を行っています。ウイルス研究所で成人T細胞白血病の原因ウイルスとして同定された、所とはなじみの深いウイルスです。ただしウイルス研究所は、必ずしもウイルスの研究ばかりではなく、生命科学における様々な研究領域が集まっています。また、定期的に開催される所内のセミナーも、国内外の様々な研究者を招待して行われます。そのため、自分の研究領域のみにとらわれることなく、様々な話題に触れることができます。所内の行事も盛んです。春には新入所者歓迎会、それに引き続くソフトボール大会、年の暮れには忘年会があり、所内の全ての研究室が集まります。他の研究室の大学院生やスタッフの方と交流を持てる良い機会です。そして何より研究生活を送るうえで、京都はよい街だと思います。博士号取得後は、ポスドクとして海外での研究に従事する予定です。



INSTITUTE OF ECONOMIC RESEARCH

経済研究所

<http://www.kier.kyoto-u.ac.jp/>

研究

経済研究所は、1962年創立以来、理論経済学および応用・実証研究の両面において、先端的な経済学研究に携わってきました。当研究所は、2010年度から「複雑系経済学」と「経済戦略と組織」という中心テーマをかかげて、基礎研究に力点を置く国際的共同研究拠点活動を展開しています。

研究テーマの柱の一つをなす「複雑系」という考え方は1960年代から自然科学や工学で発展し、物の見方を一新させた分析手法です。当研究所は、この手法を世界に先駆けて取り入れ、経済学研究を先導してきました。

もう一つのキーワード「経済戦略」は、多くの日本人が戦略的思考を苦手とし、我が国の発展を阻んでいるという問題意識の上に成り立っています。日本人が本当の意味での戦略的思考法を身につけ、組織設計を行える社会を形成しなくてはなりません。当研究所は、「経済戦略と組織」というテーマは、そのための基礎づくりを目指したものです。現在、当研究所はこうした研究方法から経済危機や災害復興の経済分析に挑戦しています。

基礎研究は現実の経済とは大きな隔たりがあると感じる方もいるかもしれませんが、欧米では、最先端の経済学研究が実生活にどんどん取り入れられています。私たちは基礎研究こそが、経済社会を根本から変革していく近道と考えています。

教育

経済研究所は大学院生・若手研究者などの教育にも積極的に関わり、多くの一流研究者を生んできました。当研究所の教員は、大学院経済学研究科の教員として、大学院生の教育に当たるとともに、日本学術振興会特別研究員、グローバルCOE研究員、招へい外国人学者等として内外の若手研究者を受け入れています。多くは、1、2年の研さんを経たのち、主要大学の教員として巣立っており、研究者の養成機関としても当研究所は高い評価を受けています。また、2003年度からは21世紀COEプログラムの拠点として、さらに、2008年度からは、慶應義塾大学・大阪大学と連携して、グローバルCOE教育研究拠点として、大学院生・若手研究者の育成や研究活動に力を入れています。



佐野 隆司助教
(経済戦略研究部門)

私の研究テーマは、様々な取引制度(ルール)の下での人々の行動分析や、望ましい取引ルールの設計です。取引ルールの違いによって人々はその行動を戦略的に変えていきます。私はゲーム理論やミクロ経済学のフレームワークを用いて、取引ルールが人々の行動に与える影響を分析し、現実の制度設計への応用を見据えながら望ましいルールの設計可能性を研究しています。

経済研究所には、ミクロ・マクロ経済学、計量経済学をはじめ、様々な分野において世界の第一線で活躍している研究者が所属しており、最先端の経済学研究を学ぶことができます。また、研究所内では国内外の第一線の研究者を招いて研究会やセミナーが頻繁に開催されており、最新の研究成果を聴き、議論する機会に大いに恵まれています。これらの研究会やセミナーは、最新の研究動向に触れることで自身の研究の刺激になるだけでなく、国内外の研究者と交流し、人的ネットワークを広げる意味においても大いに役立つと思います。



RESEARCH INSTITUTE FOR MATHEMATICAL SCIENCES

数理解析研究所

<http://www.kurims.kyoto-u.ac.jp/>

研究

数学・数理科学の基礎的研究を推進することが本研究所の目的です。このため、所員による自由な発想と思考に基づく研究活動を活発に推進することは勿論ですが、全国の数学・数理科学研究者のための共同利用・共同研究拠点の事業を実施するとともに、国際研究拠点として国際共同研究を推進しています。毎年 80 件以上の研究集会等を開催し、300 人以上の海外研究者が来訪しています。平成 20 年度より文部科学省グローバル COE の 1 つに選ばれ、平成 22 年度からは数学・数理科学の先端的共同利用・共同研究拠点として新たな事業を展開しており、本研究所は国内的にも国際的にも卓越した研究拠点として中心的な役割を果たしています。

本研究所の取り組む研究分野は、純粋数学から応用数学、数理物理学、そしてコンピュータ・サイエンスに及んでおり、基礎から応用まで幅広く、相互に有機的な関連をもち、その相互作用により新しい研究領域ならびに研究成果が生み出されています。

教育

本研究所は、大学院理学研究科、数学・数理解析専攻、数理解析系として、学生入学定員修士課程 10 名、博士後期課程 10 名を対象に、数学・数理科学の進歩を担う独創的な研究者の養成を目的とした教育を行っています。担当教員が、その研究分野に関して開講する授業（講義およびセミナー研究）によって、少人数指導で教育を行うのが、本研究所の教育の特色です。

また、学生が研究所で開催される研究集会に参加し、来訪研究者と交流を持ち、最先端の研究に接することができることも、大きな利点となっています。その他に、国内外の若手研究者（博士の学位を取得した者）を、研究員（研究機関）や日本学術振興会の特別研究員として受け入れています。

これらの若手研究者は、所員や来訪研究者との研究交流を行ったのち、各大学の教員として巣立っており、本研究所は研究者養成機関としての役割を担っています。



RESEARCH FOR REACTOR INSTITUTE

原子炉実験所

<http://www.rri.kyoto-u.ac.jp/>

研究

原子炉実験所は、昭和 38 年の設立以来、全国大学等の共同利用研究者に対して、大学の持つ原子力施設としては国内最大の研究用原子炉（KUR）を中心に、臨界集合体実験装置（KUCA）やコバルト 60 ガンマ線照射装置などを提供（平成 22 年度からは、共同利用・共同研究拠点として事業を開始）しています。年間延べ数千人の研究者や学生などが来所しており、理学、工学、農学、医学などの多方面にわたる研究が行われています。

また今日、原子力利用の各分野において大学の果たす役割への期待が益々高まっており、本実験所が培ってきた共同利用研究の実績の評価に基づき、極めて大きな期待が寄せられています。

本実験所では、このような期待に応えるべく、KUR などの諸施設を有効に利用した核エネルギー、放射線・粒子線を用いた特徴的研究を展開しております。さらに、本実験所では固定磁場強集束型（FFAG）加速器を KUCA と結合させた加速器駆動未臨界システムの基礎研究を世界に先駆けて開始するとともに、世界を牽引するべく、ホウ素中性子捕捉療法（BNCT）によるがん治療の基礎・応用研究を進展させております。



教育

原子炉実験所の教員は、研究分野として工学研究科、理学研究科、農学研究科、医学研究科、エネルギー科学研究科の協力講座を担当して、大学院の講義や研究指導を行っています。また、全学共通科目を開講して京都大学の学部学生の教育にも貢献しております。この他、KUCA を用いて全国 12 大学の原子力工学系大学院生（京都大学学部学生を含む）を対象に 1 週間の実験教育コースを毎年数回行っており、かつ平成 15 年から韓国 6 大学、平成 18 年からスウェーデン 1 大学の学生にも実施しております。原子力人材育成が世界的にも重要視されている今日、本実験所はその一翼を担っており、国内外の原子力分野の人材育成に大きく寄与しています。

博士後期課程 2 年 石本 健太さん
(理学研究科・数学・数理解析専攻)



私の研究分野は流体力学で、特に「微生物の遊泳」に興味を持って研究をしています。微生物の運動はストークス流と呼ばれる流体の式に従い、ときどき直感に反するような運動が実現されます。

例えば、流体の式の性質のために、生物の運動が制限されることが知られ、この性質は「帆立貝定理」と呼ばれています。このような数学的な側面に加え、新たな数値計算手法の開発と、医学・生物学への応用研究を行っています。数理解析研究所では図書室の豊富な蔵書や雑誌に加え、充実した計算機設備を有しており、極めて自由に使用することができ、私も大規模数値計算で大変お世話になっています。また、2012 年の春から夏にかけて 3 ヶ月間、英国オックスフォード大学に研究指導委託という形で留学し、海外でも大変有意義な研究生活を送ることができました。優れた設備と活発な交流、そして自由な雰囲気のもとで、大変充実した大学院生活を送っています。

博士後期課程 2 年 小田 達郎さん
(工学研究科・原子核工学専攻)



中性子は、物質研究のための観察手段として有用であるとともに量子力学の検証や基礎物理の観点からも重要です。エネルギー利用においては、原子炉の中で起こる物理現象の主役でもあります。私はそのような中性子に興味を持ち、貴重な中性子ビームを効率よく利用し、新たな利用方法を開発するため中性子光学の研究を行っています。特に中性子のスピンを巧みに制御して、他の方法では観察の難しい、原子スケールでの物質の構造とゆっくりとした動きを調べるための分光装置の研究開発に力を入れています。中性子を用いた実験には KUR の他にも、国内外の施設を利用しており、昨年にはフランスの研究用原子炉やスイスの加速器中性子源でも実験を行いました。KUR は共同利用施設であるため、全国の大学・研究機関から実験に来る研究者・学生と交流する機会に恵まれています。大学の研究所として放射線や放射性同位体を扱った様々な研究が行われている原子炉実験所は、この分野を究めたいと志向する学生にとって特別な場所だと思います。

PRIMATE RESEARCH INSTITUTE

霊長類研究所

<http://www.pri.kyoto-u.ac.jp/>

研究

霊長類研究所は、ヒトを含む霊長類に関する総合的研究をおこなうことを目的に、全国の研究者の共同利用研究所として京都大学に附置され、1967年に愛知県犬山市に設立されました。現在、4つの研究部門(10分野)、および2つの附属研究施設があります。人間の本性とその進化的基盤を明らかにするため、霊長類の多様な種を対象に、ゲノムから生態まで幅広い視点から学際的研究をおこなっています。京都大学の伝統であるフィールドワークだけでなく、実験室での研究もおこなわれていて、共同利用・共同研究拠点として国内外の研究者が利用できる研究体制を整えています。



教育

霊長類研究所は、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻の「霊長類学・野生動物系」として、大学院教育をおこなっており、大学院を有する国内唯一の霊長類専門の研究教育機関です。ヒトを含む霊長類に関する総合的研究を継続的に推進・発展させるためには優れた若手研究者の養成が不可欠ですが、その教育目標は以下のような特色をもっています。

1. 修士課程から博士後期課程まで、広い視野に立った教育を志している。良好な研究環境を保ち、長期的な展望に立った研究の遂行を可能にする。多様な若い人材を受け入れることは研究所の活性化にもなり、留学生や有職者を含む多様な人材の博士編入にも門戸を開いている。
2. 講義や実習を充実して、文系・理系を問わず霊長類学全般に関する基礎知識を深め、体系的な学識を身につけてもらう。
3. セミナーや研究会あるいは学際的な共同研究を通じて、異なる専門領域の研究に接する機会を数多く提供し、専攻した学問領域だけに偏らない広い視野を育成する。
4. 若手研究者を海外に派遣する ITP-HOPE プロジェクトの資金援助により、海外調査や国際共同研究への参加も積極的に推進している。2009年には国際共同先端研究センター (CICASP) が発足し、国際共同研究と英語による教育の充実を推進している。

澤田 晶子 研究員
(社会生態研究部門)



私は、ニホンザル腸内細菌叢と食性の関連性に焦点を当て、栄養生理学と採食生態学の知見の統合をモットーに、飼育実験と野外調査を組み合わせた多角的研究に取り組んでいます。多数の外国人留学生・研究者が所属し、国際色が豊かな霊長類研究所では、国内外での調査や共同研究を支援する体制が整っています。

霊長類研究所には、進化系統学・社会生態学・行動神経学・分子生理学など、各領域を牽引する研究者が多数在籍しており、専門的な助言や意見を仰ぎながら広く深く研究を進展させることが可能です。疑問が浮かんだときに気軽に質問できる環境に身を置くことは、見識を深めたい大学院生にとってこの上ないメリットであるといえます。また、複数分野の大学院生がひとつの居室を共有するため、縦(分野内)のみならず横(分野間)のつながりを持つようになります。日頃から分野を超えて議論することで、相互に良い刺激を生み出すだけでなく、専門外の人々に自身の研究内容を分かりやすく伝えるという、研究成果を社会に還元していく上で重要なスキルを身に付けることができます。

CENTER FOR SOUTHEAST ASIAN STUDIES

東南アジア研究所

<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/>

研究

東南アジア研究所には、21人の専任教員がおります。その専門は文理の8分野(法、経、文、工、農、理、医)にまたがります。スタッフの多様性と、各々の分野を超えて進めている共同研究の学際性が、研究所の特色であり強みとなっています。一例を紹介すれば、グローバル COE プログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」(杉原薫代表)があります。



このプログラムは、アジア・アフリカ地域の持続的発展に関する学際的研究を、グローバルで長期的な視野から多面的に行うために、2007年度から2011年度まで行いました。生存圏研究所などが進める「サステナビリティ学」の専門家とともに、先端の科学技術や知識を、伝統的な地域研究を支えてきた生態学、政治学、経済学、社会学、人類学、歴史学、医学などの知識と融合させることによって、革新的で実践的な地域研究を推進し、同時にその専門家や科学者の養成を行い、成果を全6巻の『講座・生存基盤論』(京都大学出版会2012)として刊行しました。この成果は、2011年度からスタートした東南アジア研究所特別経費プロジェクト「ライフとグリーンを基軸とする持続型社会発展研究のアジア展開—東アジア共同体構想を支える理念と人的ネットワークの強化—」にも引き継がれています。

また、毎年、半期に6名ずつの外国人研究員をお招きし、共同研究を進めることを通じて、東南アジア研究の国際共同研究拠点として大きな役割を果たしています。

教育

東南アジア地域研究専攻の総合地域論講座を、研究所の8人のスタッフで担当しています。各自の専門は以下のように多彩です。清水(文化人類学)、水野(経済発展論)、小泉(歴史学)、石川(社会人類学)、甲山(水文・気象学)、三重野(経済学)、小林(文化人類学)、中西(政治学)。そのほか、速水(社会人類学)と岡本(政治学)が地域変動論講座、西淵(病原細菌学)と安藤(熱帯農学)が生態環境論講座、松林(フィールド医学、老年医学)と河野(自然資源管理)が持続型生存基盤論講座の一員です。また、松林と西淵が、医学部・医学研究科においても学部生・大学院生の指導をしています。研究所スタッフの多様な研究関心と方法論が、院生へのさまざまな刺激と示唆、助言と指導に役立っています。

中西 嘉宏 准教授
(政治経済関連研究部門)



私は主にミャンマーの政治について研究してきました。1962年から軍事政権が続く同国にあって、軍隊による支配が続くメカニズムを検討し、その成果を本として出版しました。2009年のことです。そのなかで軍隊の支配がしばらく続くだろうと予想したのですが、直後からミャンマーは民主化に向けて動き出しました。予想ははずれたわけです。今は、なんで予想がはずれたんだろうと自問自答しながら、現地の新しい政治の動きを調べる毎日です。

自己弁護するわけではありませんが、研究の面白さは、自分の立てた予想や仮説が外れてはそれを修正していく試行錯誤の過程にあります。フィールドワークはそうした試行錯誤には絶好の経験です。現場での観察は研究者の予想をことごとく裏切っていくからです。そこを粘り強く再考し、また調査をし、論文としてかたちにする。なかなかしんどい作業ですが、やりがいは保証しますよ。アジア・アフリカ地域研究科ではそうしたフィールドワークを通じた知の構築のノウハウを学べます。

CENTER FOR iPS CELL RESEARCH AND APPLICATION

iPS 細胞研究所

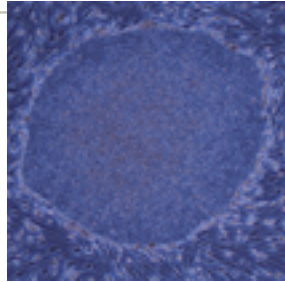
<http://www.cira.kyoto-u.ac.jp/j/>

研究

iPS 細胞研究所 (CiRA = サイラ) は、2010 年 4 月に設立され、初代所長には、世界で初めて iPS 細胞を樹立することに成功し、2012 年にノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥教授が就任しています。前身は、2008 年 1 月に物質・細胞統合システム拠点 (iCeMS) 内に組織された iPS 細胞研究センターです。iPS 細胞研究所の主任研究者は初期化機構研究部門、増殖分化機構研究部門、臨床応用研究部門、基盤技術研究部門、上廣倫理研究部門に分かれて研究活動を行っています。主任研究者の 3 分の 1 は 30 代で、若い研究者の豊かで自由な発想を重視しています。

2010 年 2 月に竣工した研究棟 (地上 5 階、地下 1 階) には、動物実験施設や細胞調製施設 (F i T : Facility for iPS Cell Therapy) を有しており、iPS 細胞の基礎研究から再生医療を目指した前臨床および臨床応用研究までシームレスに実施できる体制となっています。また、研究エリアではオープンラボ形式を採用しており、研究者間のスムーズな情報・意見交換が期待できます。さらに、研究者が研究に専念できるように、独自に知的財産や契約などを管理するサポートチームも組織しています。

iPS 細胞研究に特化した世界でも先駆的な研究機関として、iPS 細胞研究所は難病や外傷で苦しんでいる世界中の大勢の人々に役立つ新しい治



療法を開発するために、iPS 細胞作製技術を用いて創薬や再生医療を実現することを目標としています。

教育

iPS 細胞研究所では、医学研究科の一部として、初期化機構研究部門初期化制御学分野、増殖分化機構研究部門分化誘導研究分野、臨床応用研究部門疾患再現研究分野等の 9 分野で大学院教育を実施しています。また、日本学術振興会等の外部資金を活用して若手研究者を受け入れています。再生医科学研究所、iCeMS、医学研究科、医学部附属病院と密接に連携しながら、共同研究の奨励と若手研究者の交流と育成に努めています。

修士課程 2 年 佐伯 憲和さん
(医学研究科・医科学専攻)



私の所属する疾患再現研究分野では様々な遺伝的疾患を持つ患者様から iPS 細胞を樹立し、解析を行うことで発症メカニズムの解明と治療法開発、創薬を目指しています。これまで疾患研究では主に動物モデルや培養細胞株を対象に解析を行っていました。しかし、これらは高度化されたヒトの細胞集団において真の疾患メカニズムを反映しているかどうかはわからない場合があります。この問題は疾患特異的 iPS 細胞を用いた様々な細胞種における解析によって解決することが可能です。私は特に血球分化と代謝機能の関係性に着目し、血液細胞の成熟障害のある代謝性疾患由来の iPS 細胞を用いて、これまで言及されることが困難であった前駆細胞レベルでの分化障害を引き起こす分子メカニズムの解明に挑戦しています。疾患特異的 iPS 細胞は病態の理解のみならず、疾患の原因となる特定の分子異常をヒントに生命現象の解明につなげることが可能です。CiRA には iPS 細胞が与えてくれるメッセージを読み取るための最先端の技術が揃っています。貴方もこの素晴らしい環境で iPS 細胞の持つ可能性に夢を託してみませんか？

研究所・教育研究施設

教育研究施設

■全国共同利用施設

施設名	設置目的
学術情報メディアセンター (昭和 44 年 4 月開設)	情報基盤及び情報メディアの高度利用に関する研究開発を行い、教育研究等の高度化を支援するとともに、全国の大学その他の研究機関の研究者等の共同利用に供する。また、情報環境機構の行う業務を支援する。
放射線生物研究センター (昭和 51 年 5 月開設)	放射線の生物への影響に関する基礎的研究を行うとともに、全国の大学その他の研究機関の研究者の共同利用に供する。
生態学研究センター (平成 3 年 4 月開設)	生態学・生物多様性科学に関する研究を行うとともに、全国の大学その他の研究機関の研究者の共同利用に供する。
地域研究統合情報センター (平成 18 年 4 月開設)	地域研究に関する情報資源を統合し相関型地域研究を行うとともに、全国の大学その他の研究機関の研究者の共同利用に供する。
野生動物研究センター (平成 20 年 4 月開設)	野生動物に関する教育研究を行い、地球社会の調和ある共存に貢献するとともに、全国の大学その他の研究機関の研究者の共同利用に供する。

■学内共同教育研究施設

施設名	設置目的
高等教育研究開発推進センター (平成 15 年 4 月開設)	高等教育における教授法、教育課程、教育評価等、教授システムに関する実践的研究、ならびに本学の実践活動の改善について、専門的立場から助言および協力を行うとともに、その研究成果に基づき高等教育研究開発推進機構の行う業務を支援する。また、研究成果に基づいて有する教育内容および方法の改善に係る機能について、他の大学の利用に供する。
総合博物館 (平成 9 年 4 月開設)	学術標本資料の収集と収蔵、教育研究支援、研究成果の公開および学術標本資料の解析、学術的評価、情報化等の調査研究および研究資源アーカイブに関する各種資料の体系的な収集・保存・運用・これらに必要な調査研究を行う。
低温物質科学研究センター (平成 14 年 4 月開設)	液体窒素や液体ヘリウムなどの寒剤を安定的に供給し、低温科学の研究や教育を支援する。低温物質科学に関する独自の研究・教育を行うとともに、実験室・研究設備を共同利用に供する。また、環境安全保健機構の行う業務を支援する。
フィールド科学教育研究センター (平成 15 年 4 月開設)	森林生物圏、里域生物圏ならびに沿岸海洋生物圏をつなぐ現場教育とフィールド研究を行うとともに、学内および国内外からの共同利用に供する。
福井謙一記念研究センター (平成 14 年 4 月開設)	ノーベル化学賞を受賞された福井謙一博士の研究理念を継承し、基礎化学並びに関連する科学の諸分野に関する研究を進展させ、学術研究の向上を図る。
こころの未来研究センター (平成 19 年 4 月開設)	心理学、認知科学、脳科学、人文科学等の学際的研究拠点を構築し、人のこころに関する総合的研究を行う。
文化財総合研究センター (平成 20 年 4 月開設)	文化財の調査・保存・活用に関する総合的教育研究を行うとともに、京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のために必要な業務を行う。

■物質－細胞統合システム拠点	設 置 目 的
物質－細胞統合システム拠点 (平成 19 年 10 月開設)	物質科学と細胞科学を統合した新たな学際領域の創出を行う。
■その他の学内組織	設 置 目 的
健康科学センター (昭和 41 年 4 月開設)	学生及び職員の健康管理に関する専門的業務を行う。また、環境安全保険機構の行う業務を支援する。
学生総合支援センター (平成 25 年 8 月開設)	カウンセリングルーム、キャリアサポートルームおよび障害学生支援ルームからなり、学生等の修学上、適応上及び就労上の相談、苦情等への対応、就職支援及び障害のある学生の修学上等の支援等を行う。
大学文書館 (平成 12 年 11 月開設)	公文書等の管理に関する法律（平成 21 年法律第 66 号）に基づく特定歴史公文書等その他京都大学の歴史に係る各種の資料の収集、整理、保存、閲覧および調査研究を行う。
アフリカ地域研究資料センター (平成 8 年 4 月開設)	アフリカ地域の学術情報に関する国際学術誌の編集刊行、図書・地理情報・動植物標本・民族資料等の収集・整理・公開、公開研究会および公開シンポジウムの開催、国際学術協定等に基づく研究交流の推進、関連研究機関との情報交換を行う。
女性研究者支援センター (平成 18 年 9 月開設)	研究者の交流、啓発・広報、育児・介護の支援、就労形態に関する調査その他、女性研究者の支援に関する業務を行う。
白眉センター (平成 21 年 9 月開設)	次世代研究者育成支援事業の企画運営を行うとともに、同事業により雇用する教員の受入部局との協議調整その他次世代研究者育成支援事業の円滑な実施に関し必要な事項を処理する。
学際融合教育研究推進センター (平成 22 年 3 月開設)	学際的な教育研究を推進するための支援を行う。
学術研究支援室 (平成 24 年 4 月開設)	研究者の研究活動の支援を行うとともに、本学における学術研究の推進を図るため、高度な専門知識・経験を有する「リサーチ・アドミニストレーター（URA）」により、研究者が研究活動に専念できる環境を整備し、研究プロジェクトの企画・運営・研究成果の社会還元を支援する。

協力講座一覧

各研究所・教育研究施設において大学院学生として教育を受けることを希望される場合は、下記それぞれの協力講座を開講している大学院研究科に問い合わせ（91ページ参照）、受入状況をご確認ください。

研究科名	専攻名	分野・講座名	研究所・施設名
文学研究科	文献文化学専攻		人文科学研究所
	思想文化学専攻		
	歴史文化学専攻		
	行動文化学専攻		
	現代文化学専攻		
教育学研究科	教育科学専攻	高等教育開発論	高等教育研究開発推進センター
経済学研究科	経済学専攻	経済情報解析研究部門	経済研究所
		経済制度研究部門	
		経済戦略研究部門	
		ファイナンス研究部門	
		附属複雑系経済研究センター	
		附属先端政策分析研究センター	
理学研究科	数学・数理解析専攻	数理解析基礎	数理解析研究所
		解析数理	
		応用数理	
		計算数理	
	物理学・宇宙物理学専攻	電磁物理学	化学研究所
		基礎物理学	基礎物理学研究所
		核物性学	原子炉実験所
		学際物理・宇宙物理学	低温物質科学研究センター
	地球惑星科学専攻	環境地球科学	防災研究所
		応用固体地球物理学	
		応用気象・海洋学	
		学際地球惑星科学	生存圏研究所
			総合博物館

Research Institutes

研究科名	専攻名	分野・講座名	研究所・施設名
理学研究科	化学専攻	物質化学	化学研究所
		材料化学	
		情報伝達	
		細胞生物学	ウイルス研究所
		粒子線化学	原子炉実験所
		学際化学	低温物質科学研究センター
	生物科学専攻	細胞情報制御学	原子炉実験所
		生態学	生態学研究センター
		動物分類系統学	フィールド科学教育研究センター
		生体分子情報学	化学研究所
		遺伝子動態調節	ウイルス研究所
		霊長類学	霊長類研究所
		学際生物科学	総合博物館
			再生医科学研究所
			低温物質科学研究センター
			野生動物研究センター
医学研究科	医学専攻／医科学専攻	ゲノム維持機構研究	放射線生物研究センター
		クロマチン制御ネットワーク（第一分野）	
		DNA損傷シグナル研究	
		ゲノム動態研究	
		ケミカルバイオロジー	化学研究所
		細胞機能調節学	再生医科学研究所
		生体微細構造学	
		生体機能調節学	
		生体システム制御学	
		生体分子設計学	
		発生分化研究	
		再生増殖制御学	
		再生免疫学	
		組織再生応用	
		器官形成応用	
		臓器再建応用	
		ナノバイオプロセス	
		バイオメカニクス	
		シミュレーション医工学	
		腫瘍ウイルス生物学	ウイルス研究所
		発がん分子機構学	
		腫瘍ウイルス学	
		分子腫瘍ウイルス学	
		免疫細胞学	
		感染防御生物学	
		細胞生物学	
		感染病態学	
		ウイルス感染症学	
		ウイルス病態学	
		粒子線生物学	原子炉実験所
		粒子線腫瘍学	
		病原細菌学	東南アジア研究所
		フィールド医学	
		初期化制御学	iPS細胞研究所
		分化誘導研究	
		細胞誘導制御学	
		理論細胞解析	
		幹細胞分化制御学	

研究科名	専攻名	分野・講座名	研究所・施設名
医学研究科	医学専攻／医科学専攻	疾患再現研究	iPS 細胞研究所
		臓器形成誘導	
		幹細胞応用研究	
		神経再生研究	
		疫学・予防医療学	健康科学センター
	社会健康医学系専攻	予防医療学	健康科学センター
		環境生態学	東南アジア研究所
		人間生態学	
薬学研究科	薬科学専攻	ヒトレトロウイルス学講座	ウイルス研究所
		精密有機合成化学講座	化学研究所
		生体機能化学講座	
	医薬創成情報科学専攻	統合ゲノミクス	
		分子設計情報	
工学研究科	社会基盤工学専攻	防災工学	防災研究所
		計算工学	学術情報メディアセンター
	都市社会学専攻	都市国土管理工学	防災研究所
	都市環境工学専攻	物質環境工学	環境安全保健機構附属環境科学センター
			原子炉実験所
	建築学専攻	建築防災工学	防災研究所
		空間安全工学	
	機械理工学専攻	粒子線物性学	原子炉実験所
	マイクロエンジニアリング専攻	ナノバイオメカニクス	再生医科学研究所
	原子核工学専攻	核システム工学	原子炉実験所
	電気工学専攻	電波工学	生存圏研究所
		情報メディア工学	学術情報メディアセンター
			国際高等教育院
	物質エネルギー化学専攻	物質変換科学	化学研究所
		同位体利用化学	原子炉実験所
		融合物質エネルギー化学	化学研究所
			学際融合教育研究推進センター
	分子工学専攻	分子材料科学	化学研究所
			福井謙一記念研究センター
	高分子化学専攻	高分子設計	化学研究所
		医用高分子	再生医科学研究所
	化学工学専攻	環境安全工学	学際融合教育研究推進センター
			環境安全保健機構附属環境科学センター
農学研究科	森林科学専攻	森林育成学	フィールド科学教育研究センター
		森林情報学	
		バイオマス形態情報学	生存圏研究所
		生物機能材料学	
		循環材料創成学	
		木質構造機能学	
		居住圏環境共生学	
	応用生命科学専攻	分子生体触媒化学	化学研究所
		分子微生物科学	
		森林圏遺伝子統御学	生存圏研究所
		森林代謝機能化学	
		木質バイオマス変換化学	
	応用生物学専攻	里海生態保全学	フィールド科学教育研究センター
	地域環境科学専攻	放射線管理学	原子炉実験所

Research Institutes

研究科名	専攻名	分野・講座名	研究所・施設名
人間・環境学研究科	共生人間学専攻	人間社会論講座・社会行動論分野	高等教育研究開発推進センター
			こころの未来研究センター
		認知・行動科学講座・認知科学分野	こころの未来研究センター
		認知・行動科学講座・行動制御学分野	国際高等教育院
		言語科学講座・言語比較論分野	学術情報メディアセンター
		外国語教育論講座・外国語教育論分野	高等教育研究開発推進センター
	共生文明学専攻	文化・地域環境論講座・文化人類学分野	人文科学研究所
		分子・生命環境論講座・分子環境相関論分野	化学研究所
	相関環境学専攻	分子・生命環境論講座・生命環境相関論分野	放射線生物研究センター
			放射性同位元素総合センター
		自然環境動態論講座・生物環境動態論分野	ウイルス研究所
		物質相関論講座・物質物性相関論分野	国際高等教育院
		物質相関論講座・物質機能相関論分野	国際高等教育院
			放射性同位元素総合センター
エネルギー科学研究科	エネルギー社会・環境科学専攻	エネルギー社会論・エネルギー政策学	原子炉実験所
		エネルギー社会論・エネルギー社会教育	
		エネルギー社会論・エネルギーコミュニケーション論	人間・環境学研究科
	エネルギー基礎科学専攻	基礎プラズマ科学・核融合エネルギー制御	エネルギー理工学研究所
		基礎プラズマ科学・高温プラズマ物性	
		エネルギー物質科学・界面エネルギープロセス	
		エネルギー物質科学・エネルギーナノ工学	
		エネルギー物質科学・エネルギー生物機能化学	
		エネルギー物質科学・生体エネルギー科学	
		核エネルギー学・中性子基礎科学	
		核エネルギー学・極限熱輸送	原子炉実験所
	エネルギー変換科学専攻	エネルギー機能変換・高度エネルギー変換	エネルギー理工学研究所
		エネルギー機能変換・高品位エネルギー変換	
		エネルギー機能変換・エネルギー機能変換材料	
	エネルギー応用科学専攻	高品位エネルギー応用・機能エネルギー変換	エネルギー理工学研究所
		高品位エネルギー応用・エネルギー材料物理	
		高品位エネルギー応用・光子エネルギー学	
アジア・アフリカ地域研究研究科	東南アジア地域研究専攻	総合地域論講座	東南アジア研究所
情報学研究科	知能情報学専攻	映像メディア	学術情報メディアセンター
		ネットワークメディア	
		メディアアーカイブ	
		バイオ情報ネットワーク	化学研究所
	社会情報学専攻	総合防災システム	防災研究所
		巨大災害情報システム	
		危機管理情報システム分野	
		情報フルーエンシー教育	学術情報メディアセンター
		医療情報学	医学部附属病院医療情報企画部
	数理工学専攻	数理ファイナンス	経済研究所
	システム科学専攻	応用情報学	学術情報メディアセンター
	通信情報システム専攻	リモートセンシング工学	生存圏研究所
		地球大気計測	
生命科学研究科	統合生命科学専攻	形態形成学講座・ゲノム維持機構学分野	放射線生物研究センター
		形態形成学講座・ナノ生体科学分野	物質－細胞統合システム拠点
		形態形成学講座・神経発生学分野	
		細胞機能動態学講座・細胞情報動態学分野	ウイルス研究所
		細胞機能動態学講座・信号伝達動態学分野	
	高次生命科学専攻	高次生体機能学講座・高次細胞制御学分野	ウイルス研究所
		高次生体機能学講座・生体動態制御学分野	
		高次生体機能学講座・細胞増殖制御学分野	
		高次生体機能学講座・高次情報制御学分野	医学部附属病院探索医療センター探索医療開発部